

# アダム・スミス Adam Smith

(1723-1790)

産業革命初期のスコットランドに生きたアダム・スミスは、その優れた観察眼で来たるべき時代の本質を見据えた。また、人間の本性に対する観察から、市場経済の構造を描き出し、政策的含意まで導き出したという点からも現代へと続く経済学の父の名にふさわしいと言える。

## 講義のポイント

1. スミスに始まる古典派経済学がどのような世界観に基づいて作り出されたかを考えよう。
2. 「資本主義社会」というわれわれの社会の基礎的な構造を理解する。
3. 自由市場という今では当たり前になってしまった経済システムの意味を考えてみよう。

## 1 スミスの時代

- ・スコットランド・グラスゴー出身
- ・神父になる勉強をするためにオックスフォード大学に行くが、失望。デヴィッド・ヒュームに影響を受け、社会的な問題へと興味を示し始める。
- ・貴族の家庭教師としてフランスを旅行し、ケネーらフランス重農学派の人々と交わる。
- ・その後、故郷のグラスゴーに戻り、執筆活動と、大学での講義、市議会での活動を続ける。

### 主要な著書

『道徳情操論』(1759年)

『諸国民の富』(1776年)

## 18世紀後半のスコットランド

- ・産業革命へと向かう資本蓄積がおこなわれていた時期。
- ・技術革新が少しずつ進んでいた(蒸気機関を実用化したワットは、スミスがグラスゴー大学で教えていた時代に同大学でボイラー技士として働いていた。 ) 。
- 生産と交換という経済の二大活動
- ・より効率的な大量生産システムの構築を必要とされた。

ただし、イギリスの産業革命は1760年ごろから80年ほどかけて行われ、さらに半世紀ほどかけて完成されたので、実際の変化はそれほど劇的なものではなかった。この間の推

定平均経済成長率は 1%程度に過ぎない。他方で、人口の急成長期なので一人あたりに換算すると 0.5%以下である。加えて、スミスが人生の大半を過ごしたスコットランドは、ヨーロッパの果てと考えられた地方都市である。

## 2 人の行動原理と交換活動

### [1]人は利己的か？利他的か？

スミス：人は自分の利己心の充足のために行動する。

→世の中を活発にするのは利己心である（「人のため」と言いながら働いている人々で本当に人のために役立っている人はいない）。

- ・ 人は自分が生きるために働き、自分の心を満足させるために他人を助ける。
- ・ 禁欲，節制は美德か？

マンデヴィル『蜂の寓話』

毎日毎日，蜂の城では宴会続き，飲んで食べて踊り回る。しかし，そのおかげで，パン屋や八百屋，服の仕立屋などは大繁盛。

→退廃的と思われるような放蕩生活が実は，需要を喚起し経済を活性化しているという仕組み。

sympathy：他人の感情をわがことのように感じられる能力

→利己心しかもたない人間が利他的に振る舞える理由 道徳の起源

### [2] 利己的な人間がどうやって経済活動を営むか？

- ・ 分業(division of labour)：一人で全部やるよりは，手分けした方が効率が良い。  
→市場交換は社会的な分業を可能にする。
- ・ 分業とは単に職場内の分業だけではなく，国際的な分業もあり得る。  
→「見えざる手(invisible hand)」

私的な満足に基づいて行動する人々が，分業と市場交換通じて社会全体では調和しながら成長していく。

→リカードの比較優位説を経て，現代の自由貿易論へ

[3]なぜ交換が可能になるのか？

商品と商品の間には、商品の種類の違いを超えた価値尺度が存在する。

モノの中には客観的な価値基準が存在するという伝統的な考え方(真実価値論)



全ての原材料が人の手が加わらなければ、ただのモノに過ぎない。市場で取引されているモノが、すべて労働生産物であるならばそのモノの価値は労働によって決定されているのではないか。

- ・ 農業であれば、土地への労働の投下の結果、食料品が生産される。

スミスにとっての労働価値とは生命と財産の安全を維持するために必要とされる労働の量によって決定される。

労働価値説は、18-19 世紀の約 100 年間に発達した「古典派」と呼ばれる経済学の中心理論であった。

しかし、技術革新などで、いままでと同じ商品が安くなることがある。

→ということは、労働価値が変化するのか？

スミスは、労働価値は変化せず、技術革新は労働「技能」の価値を低下させると考えた。

自然価格論：労働者・資本家・地主がさらに有利な利用を求めてそれぞれの私有財産の用途を求めても、賃金も利潤も地代も等しくなってしまうような価格。

### 3 スミスの自由主義論

アダム・スミスは利己心に基づいた自己利益の追求によって社会の発展がもたらされるとしたが、スミスを自由主義の象徴のように捉える議論には問題がある。

→スミスは人々の利己心の発揮による社会の混乱(貧富の差や無法な行為)を危惧していた。

→だが、結局道徳心の発達以外に最終的な解決はないとも考えていた。

スミスが一般的に自由主義の創始者のように言われるのは、彼の反保護主義（反重商主義）論が関係している。

フランス・ルイ 14 世紀の財務官コルベールの重商主義政策の失敗は、古典派経済学者に格好の研究材料を与えた。

「経済は平和時の戦争である」

- ・ 国家の富は、国内に蓄積された金銀等の貴金属によって測られる。
- ・ 輸出を増加させ、輸入を減らすことこそ富国強兵のための基本である。

コルベールの政策

[1]生産者ギルドの形成

→競争を減らして、技術開発とその保護

[2]流通の独占

→流通にかかる費用を軽減し、安い価格の商品を海外に輸出する。

[3]関税と補助金

→輸入品に高関税をかけその増加を阻止し、輸出品の価格を低下させ促進する。

[4]農産物の低価格化

→職人たちの賃金を下げて生産物価格を低下させるために、その生活費を削る必要から、農産物の価格統制をおこなった。

コルベールの政策は、一時的に高い技術による奢侈品を生み出し、輸出を増加させたが、競争圧力の低下はやがて既得権益を生み、職人の技術を低下させ、商品の国際競争力を低下させた。加えて、農村の疲弊は農業国フランスの基礎体力を低下させた。地方の荘園領主の収入とそこから得られる税金の低下と補助金、加えて戦費が国庫を悪化させることになった

→フランス革命の遠因となる。

スミスは、国家の経済への介入を否定した。

国家の保護主義（輸出入規制や国内産業育成）

+

商人の自己利益の追求（今で言う企業家精神）

↓

既得権益化

↓

国内競争の不活発化、国際競争力の低下

つまり、スミスは、保護貿易の悪弊は単に政府の規制にのみによって、引き起こされるのではなく、政府と商人の利己心が結びつくことによって引き起こされる。

→自由市場の維持と民間企業中心主義は異なることに注意

高校の教科書などでは、「スミスが自由放任を主張した」という記述が見られることがあるが、実際にはスミスは夜警国家の支持者ではなかった（夜警国家は、ロックの主張に近い）

スミスの挙げた政府の役割

- ・インフラ（道路や橋等）の整備
- ・警察、軍事、裁判所
- ・学校教育（道徳教育）
- ・失業者への再教育、仕事の斡旋

もちろん、近代的な意味での福祉国家主義者ではなかったし、直後にドイツで生まれたりストのようなキャッチアップ経済のための保護主義者とはまったく異なっていた。

教科書 54-73 頁

**Step A 予習のために**

55 頁 「スミスの『自然』認識は、物理学的といよりはむしろ『生物学的』なものである」という一文の意味を考えてみよう。

- ・自己保存の本能

58 頁 分業＝労働の細分化の議論をまとめてみよう。

→分業と人間の資質の関係

→交換の尺度としての労働価値

63 頁 自然価格論のイメージをつかもう。

65-69 頁 なぜ「見えざる手」が『国富論』の国際貿易を説明した箇所に現れているのだろうか？

69 頁 スミスが考えた国家の役割 3 点を押さえておく。

**Step B 講義中に確認しておくこと**

(1)スミスは利己心と Sympathy をどうして矛盾無く説明し得たのだろうか？

(2)経済発展の基礎である分業は、なぜ可能になるのだろうか？

(3)スミスが、どういう点から自由放任主義者ではないといえることができるのだろうか？

**Step C さらに勉強のために**

(1)本年度は採り上げないが、マルクスは労働価値説に基づいて、資本主義社会の矛盾を描き出した。教科書 138-156 頁を参考にしながら、マルクスの理論体系を考えてみよう。

(2)スミスの「利己心」と「見えざる手」はミクロ経済学で習う「効用」と「均衡」概念の出発点になっていると言われる。それが言われる理由と、スミスとミクロ経済学の根本的な違いを考えてみよう。

(3)スミスは『国富論』の中で「イギリスの富裕階級と貧困の中にいる労働者階級の生活水準の差は、その労働者階級と 100 人の部下を連れた南海の大王の差ほどは大きくない」と指摘している。これを自由主義や格差社会の視点から考えてみよう。